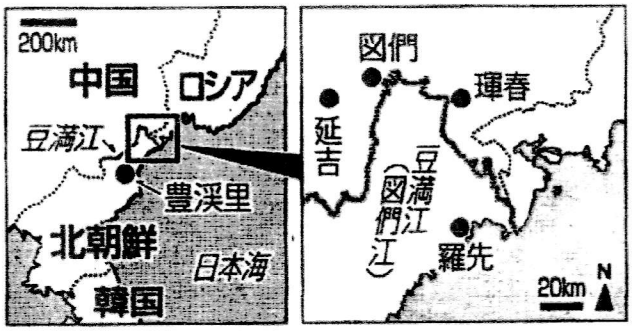
私の歩み

１９３６（昭和１１）年9月２９日　　旧満州国・間島省・琿春生まれ
ソ満国境の東満州に位置している
（現・中国東北・吉林省・琿春市）

赤　崎　雅　仁

終戦当時・満州在満国民小学校・小学三年（母と妹二人弟と五人家族）

父は終戦の年５月に根こそぎ動員で３８歳で召集されソ連国境に配置された。



１９４５年8月9日、日ソ不可侵条約を一方的に破棄し進行してきたソ連軍にたいし市政府は琿春にいた日本人に約１００キロ離れた延吉へ集団で避難を命じられる。２．３日したら帰ってくるから着の身着のままで延吉小学校舎に収容され8月１５日を迎える。終戦を境に現地人は日本人に対する鬱憤を晴らすかのように。各所で略奪が始まる。私たちの校舎にもやってきて、刃物、はさみなど人に危害を加える一切の所持品を検査、すべて取り上げられる。１０月頃食料事情もあってソ連軍の命だと思うが、再び琿春へ帰還することになった。今度は汽車ではなく徒歩で１週間かけて野宿をしながら初めて戦争に負けたと言う実感である。難民となった、老人、子連れ親子の集団、現地人の襲撃に遭わないように昼間は隠れ夜間に行動した。途中ソ連の捕虜になった日本軍は、反対方向での連行で各所で見られた。「私たちは人先内地へ帰ります」と言う言葉だった。子度達に乾パンなど投げてくれた。シベリアに送られることを知らなかった兵隊達である。この隊列の中には、父の姿はなかった。やっとたどり着いた琿春では用意されたホテルに収容され生活が始まる。ここで妹が生まれるが三日後に死亡、最初の犠牲者となる。親たちは、煙草売り、家庭のまかないなどが収入源だった。全財産を失った日本人は乞食同然の生活が待ち受けていた。家屋敷はすべて没収。

ソ連が豊富な資源と官舎のレンガまで子ども達にも仕事をさせられた。

母達は、貨車に積む使役があって、わずかな食料を得ていた。

ホテルにはソ連兵がやってきて「マダムダワイ」と言って女性刈りに遭って、顔に炭を塗ったり、丸坊主になり恐怖をしのいだ。